

鉛筆を買いに ——中尾まさみ先生に贈る言葉

アルヴィ宮本なほ子

この原稿を書いている現時点(2021年11月)ではコロナ禍の先行きが見通せないため、地域文化研究専攻恒例の3月の送別会は、対面にせよオンラインにせよ、開催されるかどうか未定です。そのため、勝手ながら架空の送別会を紙上で開催いたします。

Today we gather together on the occasion of Professor Masami Nakao's retirement from the University of Tokyo. I wish to congratulate Professor Masami Nakao for her magnificent achievements in scholarship, teaching, and professional leadership. It is with heartfelt gratitude that I thank her for her many years of invaluable contributions to academia, both intellectually and institutionally, in Japan and abroad.

She has travelled a long and extraordinary scholarly journey. She has gone far to become an internationally acclaimed scholar in Irish Studies, serving as president of The Japan Branch of the International Association for the Study of Irish Literatures (IASIL) and as an advisor to the editorial board of the English Literary Society of Japan (ELSJ). Equally important has been Professor Nakao's path-breaking role as one of the first and still very few female professors at the University of Tokyo. She has broken several glass ceilings in Japan. Her stellar academic leadership has been an indispensable role model for those who come after her.

Many of her colleagues and students in the Department of Area Studies and the Department of English Language and beyond have benefitted from her willingness to engage in scholarly and administrative activities, crossing and transcending various borders and fostering critical thought. With almost superhuman ability and versatility, Prof. Nakao has been dealing with numerous and often thankless administrative tasks, research, and teaching. These were undertaken in addition to her various roles in her family life. She has equal dexterity with her right and left hands, but that is not the point. She achieves results that require more than two hands. She uses her invisible hands to help others. I am one of those to whom her invisible, helping hand has frequently been extended when such an act of generosity is desperately needed.

This prose panegyric for Professor Nakao is small recompense for an enormous debt of gratitude I have owed to her for the past thirty-six years (!) I first met her when I was a graduate student at the English Department on Hongo Campus. Little did I dream at that time that I would be her colleague and would be given so much kind guidance and help. It started with an extremely costly phone call to the other side of the world (when I was in NZ), followed by so many instances that enabled me to see the shape of her soul, which, though invisible and intangible, is very warm, resilient, and wise. I am and will be truly grateful for her.

I take it that it is an immense comfort to Prof. Nakao that she will enter a much-awaited and well-deserved new stage of life, free from administrative duties. From April, she will have plenty of time to start what she would have wanted to do but could not have done as long as she was such a highly-sought-after, all-round professor. Undoubtedly, her distinguished career as a scholar will continue to flourish, and I hope that she will use her new flexibility to pursue her various interests to the full. My modest hope is that she will remain an important contact — as someone to whom her colleagues and students will continue to turn. I close this part with my best wishes to her for a fulfilling, healthy and happy retirement filled with many and varied new pursuits.

最初のスピーチを英語にしたのは、オンライン開催なら世界の各地から参加者があるだろうと思うからです。この後は、パーティであれば自由に歓談という感じになります。黄金色の不定形な液体の力も借りて、思い出を織り交ぜながら続けます。

2015年の日本英文学会第87回全国大会の招待発表は、中尾まさみ先生の「『旅する人々』の系譜——Seamus Heaneyの詩における移動」でした。アイルランド文学研究の泰斗の司会の方は、40年近く前の、まだ大学院生のその先生と中尾先生との最初の出会いから講演者の紹介を始めました。「中尾まさみ」という著者の論文を読んで、「ああ、[同世代に]こんな人がいるんだ、と思った」と。(英)文学がまだ非常な熱気と力を持っていたその当時、東京大学文学部英文科の大学院生が発行していたまだ創刊後間もない『リーディング』は、錚々たるメンバーが執筆しており、神保町の今はない有名な洋書店「北沢書店」の1階に平積みされていました。中尾先生より数年ほど後に大学院生になった私は、中尾先生の「不在の 대기——Seamus Heaneyの“Glanmore Sonnets”」(『リーディング』7号)でヒーニーという詩人を知るというような未熟な学生で、博士課程の上の方の先輩を「すごいな」と仰ぎ見つ、『リーディング』に掲載される論文をせっせと読んでいました。

多くの研究者に「こんな人がいるんだ」と印象づけた論文を書いていたその若い研究者は、英文学研究の極北である現代英語詩研究の分野に新しい風を送り続け、誰知らぬ者のない国際的な研究者となっていきます。『英語年鑑2017』の「回顧と展望」の「イギリス詩の研究」分野では、幾つもの書評が出た『英語圏の現代詩を読む』(東京大学出

版会、2017)を「東の横綱」と評し、『英語年鑑2018』では「斯界のリーダー格である中尾まさみのシェイマス・ヒーニー論」(「骨に書かれた文様——ヴァイキング都市ダブリンと詩人の転機」)が特記されています。この論文は、難解な現代詩の精緻な読解に基づいた理知的で鋭い分析という中尾節の真骨頂が遺憾なく示されていますが、英語の詩を日本語に変換して引用するときの複雑な書き分け——訳語に小さく添うひらがなのルビ、カタカナのルビ、詩人の声を追って踊るようなカタカナやひらがなやアルファベット——が英語の原詩を日本語の背後に淡く浮かび上がらせ、響かせるようなところがあって、思わず詩的空間に引き込まれるような側面もあります。芸術のような学問にしばし陶然となります。

2015年の招待発表を聴衆の一人として聞いていた私は、その人を紙の上でなく授業や読書会で実地に知っていたことの幸運を思い、それを専門が違う知り合いに話しました。「えっ、女の人なの？」という反応に一瞬虚を突かれ、「まさみ」という名前は、性別に関係なく使われる名前なのだとあらためて思いました。論文は内容が全てなので、著者が人間であれば性別は関係ありません。しかし、研究者が、執筆を続け、多くの研究者を感動させ、鼓舞させるような論文を書き続けるということは大変なことです。「女の人」である場合は、さらに。ヴァージニア・ウルフは、1928年にケンブリッジの最初の女子学生用のコレッジ(ガートン・コレッジ)で行った講演を纏めた『自分ひとりの部屋』(*A Room of One's Own* 1929)で、学生たちに自分の部屋と500ポンドの年収を持って著作を世に出していくことの重要さを説きます。ウルフは「あと百年あげよう」と言いますが、ほぼ百年たった現在でもそれは非常に困難なことです。ウルフは書いていませんが、それを実現するためには、早食いコンテストの優勝者かと思うほどの咀嚼スピードを子育て中に身に着ける(生協食堂で初めてお昼をご一緒した時に驚愕した)等の驚異の後天的能力の取得も必要でしょうし、「パパ弁当、ママ弁当」のような協力体制も必要です。(「パパ弁当、ママ弁当」の存在を知ったお嬢さんたちのクラスメートにとってはお弁当の時間が思いがけない発見の時間となったことでしょう。)大学に所属する研究者が研究と同時に教育と行政もすることが加速的に期待されるようになった21世紀に、大学でも学会でも「リーダー」と認識される道を進み続けるということは、ウルフですら想像できなかった険しい、道なき道を作ることだったと、その道のはるか先から何度も振り返ってもらい、時にはわざわざ引き返して手を差し伸べていただいていた私は、あらためて思います。

日本ではヴァージニア・ウルフが再度大きな注目を集め、レベッカ・ソルニットの*Recollections of My Non-Existence* (2020)が『私のいない部屋』という邦題で訳され、世界ではNetflixが“The Chair”(アメリカの有名大学英文科の初の“woman of color”の学科長が山積みの学部の問題に迷走しながら大活躍する笑いと涙の物語)を配信したことが話題になった2021年、私が中尾先生に贈る言葉を探しながら、中尾先生の巻物のように長

い業績リストと個人的な思い出の横に開いているのは、ウルフの『自分ひとりの部屋』と自分の部屋から「鉛筆を買いに」出かける現実とも想像ともつかない冒険を綴ったエッセイ“Street Haunting: A London Adventure” (1927) です。ウルフは、冬の夕刻にちょっとそこまで鉛筆を買いに出て、古本屋で様々な本を見つけ、博物館に寄り、様々な人々と関わるのですが、ちょっと鉛筆を買いに、というような気軽さで自分の部屋を出るところは同じでも、中尾先生は、約百年前のウルフよりも行動範囲がぐっと広がっています。韓国英文学会の基調講演に行き、オタゴ大学の招待講演に赴き、IASIL Japan (国際アイルランド文学会日本支部) 会長を務め、ベルファストで学会発表をしたかと思えば、駒場では、駒場博物館で「トリニティ・カレッジ・ダブリン＝東京大学学術協定締結記念 W. B. イェイツとアイルランド」展 <http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/2012.html#Yeats> をアイルランド国立図書館と東京大学総合図書館の協力とアイルランド大使館の後援を得て開催。詩の朗読 (英語と日本語)、アイリッシュハーブの演奏、イェイツが能『錦木』の影響下に書いた一幕劇『骨の見る夢』の上演などの関連企画も素晴らしい展覧会でした。

教養学部のカリキュラム大改革の真ただ中で前期英語部会主任を務め、現行のカリキュラム (基礎科目を各学期約 500 コマ、ターム制、セメスター制で提供) を纏め上げ——ここら辺の行政のエキスパートぶりについては、当時部会副主任だった高橋英海先生が『教養学部報』に書くはずなので省略——その激務の最中に、なんと、スライゴーのイェイツ・サマー・スクールで招待講演、部会主任から息つく間もなくさらに激務のグローバルコミュニケーション研究センター長に就任され、ALESS/A、TLP の特任の先生方をまとめ、英語 2 列のサポート施設 KWS (2022 年から駒場アカデミック・ライティングセンターに包摂) の面倒を見て、「東京大学トライリンガル・プログラム公開シンポジウム」を開催する大変忙しい駒場の毎日をご過ごしていらした時も、たくさんのお願いや相談に耳を傾け、いつもの的確に、暖かく、(老獪に) 対応し、仁侠道をひた走りながら、学会発表はきちんと毎年続け、さらに、元指導学生たちを中心とした詩の読書会「イェイツ研究会」も途切れることなく主催されていました。(現在、126 回となっています。)

ウルフが夢見た自分だけの部屋と年取を持ち文章を発表する女性のさらに先に行く日本の女性の大学人のなんと見事な航跡でしょうか。その人は、もうすぐ、今度は悠々と未知の大海へ乗り出すがごとく、学内行政などに縛られる駒場を離れて、次の壮大なプロジェクトへと向かわれます。時々帰ってきて、と未だに独り立ちできない未熟者は心細くなってしまおうのですが、次はどんなお仕事をされるのでしょうか。自分ひとりの静かな部屋で紡がれる多くの言葉が風に舞って世界へと運ばれ、その翻る幾つかの言の葉を手取ることを想像すると、心が熱くなります。

研究、教育、行政のかくも長きに渡る多大なご貢献は言い尽くせませんが、皆さん、グラスをお取りください。中尾まさみ先生の駒場での大きなご貢献に感謝し、ご健康とますますのご活躍、ご健筆をお祈りし、その新しい船出に乾杯。